

大館の歴史散歩

古記録・紀行文
を歩く ⑩

『郷村史略』にみる

家数と人口と馬数 (下)

安政四年(一八五七)ごろの大館市域の家数が三千百九十七戸ほど、人口が一万五千十一人、馬数が四千三百九頭、一戸当たりの平均人数(家族構成)が四・七人、平均馬数が一・三頭であったことは前回示した。今回は、それぞれの町村の数値をみながら話を進めてみよう。

原村の十戸、四十六人、八頭、橋桁村の十戸、五十一人、十五頭などである。

大きな五カ町村の合計値の大館市域全体に占める割合は、家数が四五%、人口が四七・五%、馬数が三六%で、一戸当たりの平均人数は五人、平均馬数は一・一頭となる。小さな五カ村の一戸当たりの平均人数は四・五人、平均馬数は一・二頭で、平均値では大きな町村も小さな村も差異はないといえる。

それでは他の町村をみると、どうであろうか。猿間村の平均人数は六・一人、平均馬数は三・九頭、前田村の五・八人、二・一頭など、全域平均をはるかに上回る所もあれば、上代野村の三・五人、一頭、岩神村の三人、一頭、宮袋村の三・二人一頭など、全域平均を下回る所もある。平均人数・馬数の多少は各町村がそれぞれであるというのが実態であろう。

一方、家数と人口と馬数などの規模の小さな村の数値は、岩神村の一戸、三人、一頭、宮袋村の六戸、十九人、六頭、(東)二ツ屋村の八戸、三十九人、十一頭、下川

家々の詳細な研究を持たなければ、これまで述べてきた以上のことはいえないが、馬数については「先調」数に比べ「当年調」数が激増している村があること、しかもそれは地域に片寄りがみられることなど、その実態が経済活動に起因するのではないかということを指摘できる面がある。

馬数にそのような動きがみられるのは十二所地区で、「先調」数と「当年調」数を比べてみると、曲田村が三十頭から八十一頭、軽井沢村が三十五頭から百八頭、猿間村が二十二頭から七十頭、葛原村が四十頭から百三十九頭と軒並み二・五倍から三・五倍となっている。このほかに上川沿地区で、中山村が十八頭から

五十二頭、山館村が三十八頭から八十九頭となっている。すなわちこれら以外の町村では、農耕用に、冬季間の木の切り出し用にと、それほど馬の活用目的に変化がみられなかったのに対し、米代川沿いの扇田河港上流にこのような激増がみられたことは、この地域に馬を活用する特徴的な経済活動があったことを伺わせる。

その一つは産馬産業、一つは駄送による南部領鹿角地方と大館地方の交易交流であろう。ほかに考えられることは、米代川を利用した扇田河港上流の舟運活動で、当時、馬引き舟運は陸送と比べはるかに大量に、そして安全に輸送できる手段であったと考えられる。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

『猿と日本人』

広瀬 鎮 著 第一書房

画に描かれた猿、信仰の対象としての猿、また口承文芸や芸能、祭りの世界に登場する猿など、日本人の生活文化の中に深いかかわりをもってきた猿に関する民俗を、日本各地から拾い集めた文化論。



一般書

◇海峡の使者(白石一郎) ◇卵(佐佐木邦子) ◇C・W・ニコルの森と海からの手紙(C・W・ニコル) ◇修羅の匂い(結城昌治) ◇ファスト・レーンズ(J・A・フィリップス) ◇ハッピーハウス(結城真子) ◇最終鑑定(小杉健治) ◇絆(丹羽文雄) ◇剣は湖都に燃ゆ(黒岩重吾) ◇時間のはなし(チェルニン) ほか

児童書

◇リトルベアー(リードバンクス) ◇いたずらスキッパーは、ぼくの犬(ダイナン) ほか

2月のテーマ関連図書コーナー 『のむ』

親子読み聞かせ会

毎週金曜日 午後2時30分から

中央図書館の休館日 2月18日、22日